

第84回 歌詞を自分の物語として 表現した「百恵ちゃん」

昭和40年代末期から50年代前半の歌謡界を疾走した山口百恵が引退してすでに39年、彼女は今年1月に還暦を迎えています。彼女のことを以下、「ちゃん付け」で記してしまふところに、デビューから引退まで見守った自らの昭和歌謡遍歴を思わざるを得ません。

百恵ちゃんがデビューしたのは昭和48年5月ですが、実はレコード・デビューのひと月前に『としごろ』というデビュー曲と同名の松竹映画に出演しています。主演は松竹の新人・秋谷陽子でしたが、ホリプロが製作しているだけに、百恵ちゃん以外に和田アキ子、森昌子、石川さゆりが共演しています。

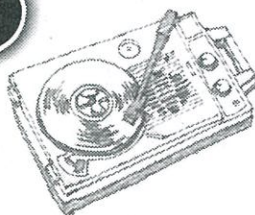
百恵ちゃんは実年齢どおりの中学3年生のバレエボール部員役で登場。体操着姿で練習する少し太めの彼女からは、初々しさと同時に、いわゆる「健康的なお色気」をアピールしようとする製作側の狙いも感じられます。百恵ちゃんはデビュー曲のタイトルを映画の題名に使われただけ

で持ち歌の歌唱シーンなどはありませんが、しっかり演技しています。デビュー曲の『としごろ』には「人

名曲カルテ

昭和歌謡と いっまでも

堀井六郎 浦本松絵



にめざめる14才」という副題がついていました。「人」とは異性というより女性としての自分自身を指し、この副題で「女性としての自覚」性のめざめ」を意味したかったのでしょうか。

こうしたダブルミーニング的な思わせぶりは、翌年の『ひと夏の体験』で歌われる「少女にとって一番大切なもの」、後期の話題作『美・サイレント』での沈黙の四文字など、実録風「山口百恵ストーリー」を歌い続ける戦略のイメージ作りに貢献していきます。

百恵ちゃんがデビューした昭和48年は、2月に桜田淳子『天使も夢みる』、4月に浅田美代子『赤い風船』、5月にあべ静江『コーヒーショップ』



で、『7月に安西マリヤ『涙の太陽』がデビューし、年末のレコード大賞新人賞には、右記4人と前年デビューのアグネス・チャンの5名が選出され、百恵ちゃんは選外でした（最優秀新人賞は桜田の『わたしの青い鳥』）。

今振り返れば意外な結果かもしれませんが、シングル第2弾『青い果実』がヒットしたとはいえ、テレビドラマ『時間ですよ』の挿入歌『赤い風船』の売り上げには遠く及ばず、涙を飲みます。されど時代は『おさな妻』に続き『同棲時代』がテレビや映画に登場、「青い性」を歌うには追い風となり、翌49年、15歳になった山口百恵の逆襲が始まります。

彼女のレコーディング・ディレクターを長く務めたホリプロの川瀬泰雄氏の著書には、「シングル盤5曲目の『ひと夏の体験』は、すでにデビューして間もない頃にできあがっていて『甘い誘惑』というタイトルだった」と明かすCBSソニー・酒井政利氏の話が掲載されています。音楽的な素養よりも、彼女が歌詞を自分の物語として表現できる女優の才能に長けていることを、酒井氏はデビュー当初から見抜いていたのでしょう。